様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００６５９

研究課題名（和文）統語的対象物のラベル付けと線状化に関する比較統語論研究

研究課題名（英文）A Comparative Study on Labeling of Syntactic Objects and Linearization

研究代表者
瀧田　健介（Takita, Kensuke）

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：５０６３２３８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主な成果として、ラベル付けと線状化に関する本研究の中心仮説を論文としてまとめたものが国際専門誌に掲載されたことがまず挙げられる。また、関連する研究として日英語の統語的アマルガム、形容詞句を残余句とするスルーシング、日英語の等位接続wh疑問文における省略現象、日本語の名詞節におけるN'削除現象と主題役割付与、日英語の難易構文における空演算子の性質、主格目的語を中心とする日本語文法格の認可理論、英語の先行詞包含型スルーシングおよび日本語のスルーシングにおける定性の不一致現象など、広範囲にわたる現象について国内外の学会で発表し、その一部を論文として公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、比較統語論の中心的な問題の一つである「統語的対象物のラベル付け」に関して線状化の観点から新しい仮説を打ち出し、そこから得られる様々な帰結を探ったものである。研究成果の学術的意義としては、当初の中心的課題だけでなく、省略現象や移動現象、文法格や主題役割の認可、統語的アマルガムや名詞節の内部構造などについて広範な帰結が得られることを示した点があげられる。また、2022年度に開催された生成文法を代表する国際学会GLOW in Asia XIIIの併設ワークショップにおいて本研究の中心的仮説をまとめた論文がターゲット論文として選ばれていることも、その学術的意義を裏付けていると考えられる。

研究成果の概要（英文）：One of the main achievements of this study is the publication of the paper in the international journal, which formulates the main hypothesis of this study, namely the " labeling for linearization" hypothesis. Furthermore, a number of related studies covering a wide range of phenomena were presented at domestic and international conferences. The phenomena include: the structure of syntactic amalgams in Japanese and English, sluicing with adjectival remnants, ellipsis in coordinated wh-questions in English and Japanese, N'-deletion and theta-role assignment in nominal clauses in Japanese, the nature of null operator found in Japanese and English tough-constructions, licensing of grammatical Case with main focus of nominative-subject constructions in Japanese, and certain mismatches found in antecedent-contained sluicing in English and genuine sluicing in Japanese. Some of these presentations have been published as papers.

研究分野：統語論

キーワード：ラベル付け　線状化　省略現象　スルーシング　文法格　主題役割　軽動詞構文　比較統語論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現代言語学がとらえようとしている自然言語の大きな特徴の一つに、「複数の統語的対象物から成り立つ句があったとき、その中のいずれかの統語的対象物がその句全体の性質を決める」という性質がある。この性質は、生成文法理論においては句がラベルをもつ、と仮定することでとらえられてきたが、句構造構築の理論的進展に伴い、ラベルは所与のものではなく、一定のアルゴリズムにしたがって決定されるものであるという見方が展開されてきている。これに関して、「どのようにラベル付けがなされるか」については世界的に研究成果があげられてきているが、「なぜラベル付けが必要なのか」、より具体的には「ラベル付けが適正になされなかった場合、どのような問題が生じるのか」という問いについてはあまり追及されていなかった。そのため、本研究ではこの問いをその中心に据えることで、それまでには得られなかったような新しい視点と帰結を得ることを目指した。

２．研究の目的

本研究では、「「統語的対象物のラベル付け」という概念の理論的位置づけの明確化」および「統語部門と音韻部門・意味部門とのインターフェースの性質の解明」の 2 点をその中心的な目的とした。その上で、「統語構造の線状化とラベル付けの関係」、「発音されない要素とラベル付けの関係」、「省略現象とラベル付けの関係」の 3 点を具体的な研究課題として有機的に関連させながら取り組むことで、上記 2 点の研究目的を達成することを目指した。

３．研究の方法

英語および日本語を中心とした個別言語の詳細な検討および言語間の相違点を比較・検討する比較統語論の手法を用いて研究を行った。研究成果に関しては逐次国内外の学会・研究会にて発表し、幅広く専門家との意見交換を行い、その一部については論文として公刊した。研究期間内に発生した新型コロナウイルスの世界的な蔓延などの理由により、当初予定していた米国コネティカット大学言語学科への短期訪問は 2018 年度のみの実施となり、2019 年以降の一部の学会発表は取りやめざるを得なかったものの、オンラインの学会や研究会、メール等によるやり取りによってできる限り研究を予定通り遂行することを目指した。

４．研究成果

研究期間内に得られた主な研究成果について、研究目的において掲げた具体的な研究課題に沿ってまとめる。研究内容によっては複数の課題にまたがるものもあるが、最も関連性の高い研究課題の箇所において概説することとする。

(1) 統語構造の線状化とラベル付けの関係

①Takita (2020)において、本研究の中心的な仮説である「線状化に基づくラベル付け仮説」を具体的な定式化とともに整理し、論文として出版した。まず、Chomsky (2013, 2015)で示唆されているラベルが必要とされる理由付けについて、統語部門と意味部門のインターフェースにおいてはラベルの必要性が認められないことを論じ、統語部門と音韻部門のインターフェース、特に統語構造の線状化においてラベルが必要となると仮定する必要があることを論じた。また、この提案が従来のラベル付け理論において問題となっていた主要部同士の併合における問題も解決できることを示唆した（この点については、以下(1)-②で述べる研究成果においてより詳細に検討をおこなった）。また、当該仮説の経験的なサポートとして、従来の理論では未解決であった転送領域の可変性の問題、および日本語に観察される「助詞残留型省略」についてより妥当な分析が可能になることを示した。

②Takita (2018), 瀧田 (2021b)、瀧田 (2022a)、Takita (2023b)などにおいて、日本語の接辞「-方」によって節が名詞化されているように見える現象（「太郎が寿司を食べた」→「太郎の寿司の食べ方」など）と動名詞（「ジョンの村人へのオオカミが来るとの警告」）の N’-削除と呼ばれる省略現象における振る舞いの違いの比較を通じて、これらの句の内部構造を明らかにし、主題役割の付与メカニズムに関する新しい提案を行った。特に、動詞などの述語とは独立に項を導入して主題役割を与える機能範疇の存在を仮定し、それがChomsky (2015)およびSaito (2016, 2018)・斎藤 (2020)で提案されている「ラベル付けに参与しない要素」の一種であると仮定することで、当該現象の日英語の相違を「線状化に基づくラベル付け仮説」に基づいてとらえられることを論じた。同時に、省略に課される同一性条件について、従来広く検討されてきた節レベル

の省略では態（voice)の不一致が許されるものの、「方」名詞節や動名詞節ではそのような不一致が許されないことを発見し、その理論的帰結を検討した。

③Takita (2022b)において、Yoshida (2010)が論じている「先行詞包摂型スルーシング(Antecedent-Contained Sluicing, ACS)」に対する新しい分析を「線状化に基づくラベル付け仮説」に基づいて提案した。Yoshida (2010)においては省略される TP がその先行詞として VP を取れるという不一致を許すことで説明されていた ACS の各種の特徴が、TP が実際に構造上は存在せず、CP が直接 VP を補部に選択することができると仮定することで説明できることを論じた。また、通常は許されないこの CP と VP の選択関係は、ラベル付けが線状化のために必要であり、省略されることによって線状化の必要がなくなると仮定することで可能になると分析することで、本研究の仮説を強く支持することができると論じた。また、この成果を応用し、瀧田 (2022c)、瀧田 (2023a)において日本語のスルーシングにおいて省略部とその先行詞の時制が一致していなくても省略が可能になるという新しい発見についても自然に説明できることを論じた。

以上の研究成果のうち、②と③については 2023 年度に採択された基盤研究(C)「ラベル付けに基づく統語構造の線状化仮説に関する比較統語論研究」(課題番号 23K00581)において引き続き研究を継続する予定である。

(2) 発音されない要素とラベル付けの関係

①Takita, Maeda & Nakamura (2022)において、日英語の難易構文に現れる発音されない演算子(空演算子, Op)の形成方法について検討した。特に、日本語の難易構文のうち、従来研究されてきた「この本が読み”やすい”」という形式の難易構文と異なり、「この本が読むことが”易しい”」という形式の難易構文においてはいわゆる島の制約に関する振る舞いが異なることを発見し、Chomsky (2021)などによって提案されている「コピー形成 (Form Copy)」と呼ばれる操作を応用することでこの観察が説明できることを論じた。

発音されない要素に関する以上の①の研究成果では、「線状化に基づくラベル付け仮説」に直接結びつく議論を発展させることはできなかったものの、発音されない要素に関して新しい理論的枠組みにおける分析を提案したことで、今後の研究への土台が形成できたと考えられる。

(3) 省略現象とラベル付けの関係

①Takita & Maeda (2019)および Maeda & Takita (2019)において、「統語的アマルガム」と呼ばれる現象について検討した。統語的アマルガムとは、「オスロに[誰だったか]が行くと聞いた」のように通常は節として振る舞う「wh 句+コピュラ+か」が、あたかも名詞句として振る舞う現象である。この現象について、Kluck (2011)が英語やオランダ語の観察に基づいて提案している分析を応用し、統語的アマルガムの形成に節レベルの省略が関与していることを示した。

②瀧田 (2019), 瀧田・中村・前田 (2019), 瀧田 (2021a)などにおいて、形容詞句を残余句とするスルーシング (「太郎はとても長い本を読んだらしいが、僕は[どれくらい長いか]知らない」など)について検討を行った。まず、先行研究においては英語やポーランド語に基づいて観察されている性質が日本語の形容詞残余句スルーシングにおいても観察されることを示し、それが Takita (2010)などで議論されている日本語における真のスルーシングの分布を解明する手掛かりになることを論じた。また、残余句が等位接続される「等位接続スルーシング」と、wh 疑問文において wh 句が等位接続される「等位接続 wh 疑問文」(以下(3)-③も参照)の関係を解明する手掛かりとしても有効であることを論じた。

③Maeda, Nakamura & Takita (2021)において、等位接続 wh 疑問文 (“What and when does John eat?”や「誰がそして何をビルに飲ませたの?」など)の構造について検討を行った。特に、等位接続される wh 句が形容詞句である場合 (「どんな、そして何色のドレスをユキは買ったの?」など)を中心的に検討することで、等位接続 wh 疑問文には音韻部門での省略操作が関与していることを論じた。

省略現象に関する以上の①-③の研究成果では、本研究の中心的な仮説である「線状化に基づくラベル付け仮説」に直接結びつく議論を発展させることはできなかったものの、省略現象に関して各種の新しい経験的発見および理論的提案の蓄積ができたため、今後の研究への土台が形成できたと考えられる。

＜引用文献＞

Chomsky, N. (2013) Problems of Projection. *Lingua* 130, 33-49.

Chomsky, N. (2015) Problems of Projection: Extensions. In E. Di Domenico, C. Hamann & S. Matteini (eds.), *Structures, Strategies and beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, 3-16, John Benjamins.

Chomsky, N. (2021) Minimalism: Where are We Now, and Where Can We Hope to Go. *Gengo Kenkyu* 160, 1-41.

Kluck, M. (2011) *Sentence Amalgamation*. Ph.D. dissertation, University of Groningen.

Maeda, M., T. Nakamura & K. Takita (2021) Left Branch Extraction in Coordinated Wh-Questions in Japanese and English. *Japanese/Korean Linguistics 28*, 51-65. CSLI Publications.

Maeda, M. & K. Takita (2019) Syntactic Amalgams in Japanese. Paper presented at GLOW 42 Main Colloquium, University of Oslo, Oslo, Norway, May 2019.

Saito, M. (2016) (A) Case for Labeling: Labeling in Languages without φ-feature Agreement. *The Linguistic Review* 33, 129-175.

Saito, M. (2018) Kase as a Weak Head. In L. Kalin, I. Paul & J. Vander Klok (eds.), *Heading in the Right Direction: Linguistic Treats for Lisa Travis*, 382-390. McGill University, Montreal

斎藤衛 (2020) 「弱主要部と言語類型論―日本語の文法的特質をめぐって―」斎藤衛・高橋大厚・瀧田健介・高橋真彦・村杉恵子 (編)『日本語研究から生成文法理論へ』, 2-18. 開拓社.

Takita, K. (2010) *Cyclic Linearization and Constraints on Movement and Ellipsis*. Ph.D. dissertation, Nanzan University.

Takita, K. (2018) Voice-Mismatches under Japanese N'-Deletion and Syntactic Identity. Paper presented at GLOW 41 Main Colloquium, Research Institute for Linguistics, Hungarian Academy of Sciences, Budapest, Hungary, April 2018.

瀧田健介 (2019)「形容詞を残余句とするスルーシングについて」関西言語学会第 44 回大会, 関西大学, 2019 年 7 月

Takita, K. (2020) Labeling for Linearization. *The Linguistic Review* 37, 75-116.

瀧田健介 (2021a)「不定詞節におけるスルーシングを巡って」Comparative Syntax and Language Acquisition (CSLA) #11, 南山大学言語学研究センター (オンライン), 2021 年 2 月.

瀧田健介 (2021b)「N 削除からみる日本語動名詞の内部構造」Workshop on Ellipsis in Japanese, オンライン, 2021 年 9 月.

瀧田健介 (2022a)「ラベル付けとθ役割付与」Comparative Syntax and Language Acquisition (CSLA) #13, 南山大学言語学研究センター (オンライン), 2022 年 3 月.

Takita, K. (2022b) Revisiting Antecedent-Contained Sluicing: A View from Labeling. Paper presented at Workshop "Mapping Out the Dynamics of Variation in Ellipsis Mismatches" at The 40th Annual Meeting of The English Linguistic Society of Japan, online, November 2022.

瀧田健介 (2022c)「日本語スルーシングにおける定性の不一致について」日本英文学会関西支部第 17 回大会, 甲南大学, 2022 年 12 月.

瀧田健介 (2023a)「スルーシングにおける TP レベルの不一致の分析」10th Okayama Linguistics Forum, ノートルダム清心女子大学, 岡山, 2023 年 2 月.

Takita, K. (2023b) Flexible Theta-Marking and (Anti-)Labeling. Poster presented at The 30th Japanese/Korean Linguistics Conference (J/K 30), Simon Fraser University, Vancouver, British Columbia, Canada, March 2023.

Takita, K. & M. Maeda (2019) The Ins and Outs of Syntactic Amalgams in Japanese. Paper presented at The 6th Workshop of the NINJAL Collaborative Research Project "Generative Perspectives on the Syntax and Acquisition of Japanese," Nanzan University, Nagoya, Japan, April 2019.

Takita, K., M. Maeda, & T. Nakamura (2022) Varieties of *Tough*-Constructions and FormCopy. *Proceedings of the 13th Generative Linguistics in the Old World in Asia (GLOW in Asia XIII) 2022 Online Special*, 257-269. Department of Linguistics and Modern Languages, The Chinese University of Hong Kong.

瀧田健介・中村太一・前田雅子 (2019) 「等位接続された残余句を含むスルーシングと島の修復」. 日本英語学会第 37 回シンポジウム「フェーズ境界を超える意味・音声解釈―フェーズ理論に基づく言語インターフェースの研究―」, 関西学院大学, 2019 年 11 月.

Yoshida, M. (2010) Antecedent-contained sluicing. *Linguistic Inquiry* 41, 348-356.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Maeda, Masako, Taichi Nakamura and Kensuke Takita	４．巻 28
２．論文標題 Left Branch Extraction in Coordinated Wh-Questions in Japanese and English	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	６．最初と最後の頁 49-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Takita Kensuke	４．巻 37
２．論文標題 Labeling for linearization	５．発行年 2020年
３．雑誌名 The Linguistic Review	６．最初と最後の頁 75～116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/tlr-2019-2035	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計24件（うち招待講演　14件／うち国際学会　9件）

１．発表者名 Kensuke Takita, Masako Maeda and Taichi Nakamura
２．発表標題 Varieties of Tough-Constructions in Japanese and FormCopy
３．学会等名 GLOW in Asia XIII Workshop on Workspace, Merge, and Labeling（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Masako Maeda, Taichi Nakamura and Kensuke Takita
２．発表標題 Nominative Objects in Causative-Potential Constructions in Japanese
３．学会等名 The 24th Seoul International Conference on Generative Grammar（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kensuke Takita
２．発表標題 Revisiting Antecedent-Contained Sluicing: A View from Labeling
３．学会等名 日本英語学会第40回大会ワークショップ "Mapping Out the Dynamics of Variation in Ellipsis Mismatches"
４．発表年 2022年

１．発表者名 瀧田健介
２．発表標題 日本語スルーシングにおける定性の不一致について
３．学会等名 日本英文学会関西支部第17回大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 瀧田健介
２．発表標題 スルーシングにおけるTPレベルの不一致の分析
３．学会等名 10th Okayama Linguistics Forum（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Kensuke Takita
２．発表標題 Flexible Theta-Marking and (Anti-)Labeling
３．学会等名 The 30th Japanese/Korean Linguistics Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 瀧田健介
２．発表標題 N’削除からみる日本語動名詞の内部構造
３．学会等名 Workshop on Ellipsis in Japanese（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 小町将之・北原久嗣・葛西宏信・瀧田健介・大滝宏一・内堀朝子
２．発表標題 Strong Minimalist Thesis を満たす UG の説明理論: その輪郭と概念的根拠
３．学会等名 日本英語学会第39回ワークショップ
４．発表年 2021年

１．発表者名 瀧田健介
２．発表標題 ラベル付けとθ役割付与
３．学会等名 Comparative Syntax and Language Acquisition (CSLA) #13（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 瀧田健介
２．発表標題 Notes on Tough-Movement and FormCopy
３．学会等名 Seeking a Genuine Explanation: 慶應生成文法研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Masako Maeda, Taichi Nakamura and Kensuke Takita
２．発表標題 Left Branch Extraction in Coordinated Wh-Questions in Japanese and English.
３．学会等名 The 28th Japanese/Korean Linguistics Conference（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 葛西宏信・小町将之・大滝宏一・瀧田健介
２．発表標題 Zoom with a Minimalist View #1: Mamoru Saito’s Work 2017-2020
３．学会等名 慶應言語学コロキアム（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 瀧田健介
２．発表標題 不定詞節におけるスルーシングを巡って
３．学会等名 Comparative Syntax and Language Acquisition (CSLA) #11（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kensuke Takita and Masako Maeda
２．発表標題 The Ins and Outs of Syntactic Amalgams in Japanese
３．学会等名 The 6th Workshop of the NINJAL Collaborative Research Project "Generative Perspectives on the Syntax and Acquisition of Japanese"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masako Maeda and Kensuke Takita
２．発表標題 Syntactic Amalgams in Japanese
３．学会等名 The 42nd meeting of Generative Linguistics in the Old World (GLOW 42)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 瀧田健介・前田雅子
２．発表標題 日英語の統語的アマルガムについて
３．学会等名 日本英文学会第91回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 瀧田健介
２．発表標題 形容詞を残余句とするスルーシングについて
３．学会等名 関西言語学会第44回大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 瀧田健介
２．発表標題 省略現象を巡る諸問題：同一性条件を中心に
３．学会等名 同志社英文学会2019年度大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 瀧田健介・中村太一・前田雅子
２．発表標題 等位接続された残余句を含むスルーシングと島の修復
３．学会等名 日本英語学会第37回シンポジウム『フェーズ境界を超える意味・音声解釈―フェーズ理論に基づく言語インターフェースの研究―』（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kensuke Takita
２．発表標題 Voice-Mismatches under Japanese N’-Deletion and Syntactic Identity
３．学会等名 The 41st meeting of Generative Linguistics in the Old World (GLOW 41)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kensuke Takita
２．発表標題 Argument Structure Alternations under N’-Deletion
３．学会等名 The 3rd Workshop of the NINJAL Collaborative Research Project "Generative Perspectives on the Syntax and Acquisition of Japanese"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kensuke Takita
２．発表標題 A Way of Examining Voice-Mismatches under Ellipsis in Japanese
３．学会等名 UConn Linguistics 50th Anniversary Celebration（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 瀧田健介・斎藤衛・村杉恵子
２．発表標題 日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得
３．学会等名 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」 第3回合同研究発表会 Prosody & Grammar Festa 3（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 前田雅子・瀧田健介
２．発表標題 A Syntactic Analysis of Amalgams in Japanese
３．学会等名 青山英語英文学研究会 Vol. 22（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 斎藤衛・高橋大厚・瀧田健介・髙橋真彦・村杉恵子	４．発行年 2020年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 320
３．書名 日本語研究から生成文法理論へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関